

草稿「自分らしさ」の研究

——江藤淳の死——

佐賀枝 夏文

はじめに

1 (佐賀枝)

ひとは、ものを考え、それぞれに態度を決めて生活者として生きている。ひとの行動や思考には、共通するところもあるが、それぞれに個性がある。個別であることは、他者から「そのひとらしさ」として映り、本人としては「自分らしさ」そのものである。多少誇張すれば、「自分らしさ」で、人生を生きているともいえるだろう。生涯を一貫する固有のものであるといえるであろう。「自分らしさ」が「いつ」「どのよう」に「だれによって」形成されたか。また、固定的なものなのか、可塑性のあるものなのか。なにを指して「自分らしさ」なのか、興味と関心はつきる

ことがない。漠とはしているが、確かに「自分らしさ」は人間を説明する鍵であり、人生のなぞを解く鍵でもある。「自分らしさ」は第一に、人間を個別化するはたらきがある。「自分らしさ」は他者と、別々の存在としての境界ともなる。反面、「他者と自己」の関係成立の要件でもある。「自分らしさ」は、言葉や行動の特性の要因であり、固有の生命体として成立の要素をつくりだしている。人生の横断面では、人間関係を築く上でお互いの「自分らしさ」の異同が、日常的に問題をはらんだり、関係の成立や破綻の原因ともなる。人生を俯瞰すれば、人生の物語りを決定するのは「自分らしさ」である。青年期という時期に焦点を当てれば、「自分らしさ」の自己評価は低く、不満

を持ちがちである。青年期には肥大した「自分らしさ」を持ちがちで、原寸大に認めることが難しい。

「自分らしさ」とは何か、という素朴な問いを大切にしつつ作業をすすめてみたい。実態としては、つかみにくい「自分らしさ」を浮き彫りにできれば幸いである。福祉実践と心理臨床という人間関係を基盤とするしごとにて、「人間と喪失」を研究課題としてきた過程で、本稿のテーマが浮上した。「自分らしさ」と江藤淳の死は、一見関係がないようにみえるが、江藤淳の「死」を解く鍵として、彼の「自分らしさ」をモチーフとしたことをあわせて理解していただきたい。

第一章 「自分らしさ」と原形

「自分らしさ」を考えるにあたって、ひとつの仮説をもとに考えてみたい。「自分らしさ」の形成には、ある前提を仮定すると説明が容易につくところがある。「自分らしさ」が形成されるためには、そのためのしくみがあると考えられる。外界の情報を取り入れる「窓」と、取り入れた情報を処理するシステムである。この「窓」は、個々別々であり、固有のものである。同一の環境で生活したとしても、取り入れる「窓」がそれぞれに違うためにその時点で

差異が生じる。「窓」は先天的なものであり、取り入れた情報の処理システムが後につくられたと考えるのが妥当であろう。結果として、二重に差異が生じ、ひとの個別化を促進する。

第一節 原形の形成

ひとは取り巻く環境や条件などのなかで生きている。同一環境におかれても、個々に時間感覚、価値観、思考方法は異なる。どのような状況におかれても「らしさ」は堅固であり、変容しない。同様に幼児期、思春期、青年期、壮年期、老年期とそれぞれの生涯発達は、別々のものが積み重ねられるのではなく、ある一貫性の上に発達の過程がある。それがラセン状であれ、直線であれ寸断されないで継続していると考えられる。そのことから、幼児期の早期に形成されて、生涯にわたって変わることがない、と考えられる。この説明は、先天的な「窓」と後天的な情報処理システムをモチーフに考えれば了解ができる。この両者が合体したものが「自分らしさ」の原形である。

原形は早期に形成される根拠として、やや古典的となるが大脳生理学者の時実利彦の研究成果に依って考えることができる。誕生時、約一四〇億の神経細胞をもっており、

そのネットワークが三歳にはおおむね完成し、思考回路として機能する時期が三歳ごろである、という説である。これに基づけば、おおむね三歳で生涯の基盤形成ができあがる。時実の説と符号するのは、遠城寺宗徳の研究成果でも証明できる。遠城寺の「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表」によると、通過率や言語理解に顕著な変化の時期が同様にある。通過年齢三歳前後の検査項目に「ままごと役割を演じることができ」は、「他者と自分」の弁別認識の指標と考えられる。このことからしても三歳前後で、他者との境界ができあがり、時実の説が妥当性をもつといえる。外界の情報処理システムがパターン化するために、思考傾向に特色が生まれる。受容的な傾向が強くなる場合、拒否的な傾向が強くなる場合があり、幼児期の体験が誘因となると考えられる。

第二節 原形と母語

ひとは、その社会、時代、文化の影響を強く受ける。ひとは「社会の寵児」「時代の寵児」「文化の寵児」であることには間違いない。母国や母語は、「自分らしさ」と密接な関係がある。「自分らしさ」の象徴として、母語は大きな役割がある。母語の獲得と、文字獲得までを含めて考え

るとやや問題は複雑ではあるが重要な課題である。音声言語の獲得だけであれば、時期的に早い段階が考えられるが文字言語の獲得までを含めるとやや長期ということになる。言語獲得時期と情報処理システムの形成期とが同一同時とはいいたい部分はあるが近似であるだろう。表出言語が形成される過程で、喃語 *babbling* の時期、さらに喃語から一語文 *one-word sentence* への時期が情報処理システムの形成との密接な関係が考えられる。言語としてシンボル化するためには、言語としてシンボル化される対象の意味が一致していることが求められる。

「母語」の獲得の時期を情報処理システム形成の時期と考えた場合は、さらに内言語 *inner speech* との関係を見できない。内言語と外言語 *outer speech* と同質ではない。「内言語と現実」と「外言語と現実」とは、違うと考えるのが妥当である。「思うこと」と「言語、行動」とは同質ではない。例示としては不適当かもしれないが、先天的に聴覚に障害のあるひとが音声言語を聞いた経験したことや、音がなくても、「思うこと」にはなんら問題がない。音声言語と同質の言語で思考しているわけではない。「自分らしさ」の形成の時期とする根拠のもうひとつは、「自分らしさ」を形成していく過程で、内言語と外言語の果たす

役割が考えられる。表出された言語ばかりではなく、語られることがない内言語のはたらきと役割も重要である。

第三節 原形の果たす役割

原形は終生、変わりにくいことを精緻に証明することは困難なことではあるが、試みたいことである。母語で置き換えて説明をしてみるならば、母語の格納部位は大脳の最も深いところである。母語は加齢現象からも、欠落や障害から守られている。加齢現象で運動能力や短期記憶などが低下するが、母語は損傷を受けることなく保たれる。仮説の域をでないが、母語が格納される部位に「自分らしさ」の原形があると考えられる。その根拠としてひとが終命するまで、物体と化すことなく「自分らしく」人間でありつづけるのは原形が失われないからである。「原形」は、そのひとである証明であり、ある一貫性の保持という役割を果たす。「原形」の変容することなく、変質や変容しにくいと考えたい。その数は少ないが症例として、人格変容や人格障害がある。人格変容には二通りあり、ひとつは脳血管障害によって引き起こされるものがある。三五歳でクモ膜下出血を受症し、その後甚だしい人格変容を来した症例とであったことがある。また、右大脳の出血を受症し、

その後遺症で、病前と人格変容を来した症例にもであった。あきらかに大脳の器質部位の病巣が起因した「人格変容」である。この症例に通じるのは脳血管障害としては重度の病巣を抱えたものであった。この二つの症例は、病前と病後ではあきらかに人格変容がみられたものである。病前と病後の人格変容について、家人や知人が語るの「らしさ」がなくなっていることである。

もう一つは、思春期前後の不安定な時期に、他者から何らかの「いじめ」や「虐待」を受け、「自分らしさ」を修正しようとした事例である。いくつかの事例とであつてきたが、その端的なものは「いじめ」が起因して、不登校へ入り込んだものである。なかでも、ひきこもりが長期化したためにおきる対人関係面の未成熟が二次的な問題となる場合もある。しかし、問題となるものは、極めて少ないが人格障害にいたる場合である。

アパシー *apathy* にみられるように、症状からアパシーを呈するの、ひきこもりからアパシーの状態に入り込んだのか判断は難しい。ひきこもりではなく、パニックや行動化を伴い人格障害を呈する事例もある。生涯を通じて原形が、保持されることが本来のあり方である。

第四節 原形の修正は可能か

「修正」「変容」がはたして可能であるか。この問いに
 対して、最近問題化している「不登校」問題が想起される。
 「いじめ」や「不登校」が急激に増え、社会問題として浮
 上ってきていることは、周知のことである。そのひとつの
 国家的な取り組みが、文部省の一九九五年度スタートした
 「スクールカウンセラー活用調査研究事業」である。

筆者が活用調査研究委託事業に派遣スクールカウンセラー
 として、臨床の場での経験を交えて報告してみたい。臨床
 現場で気にかかることのひとつに、「悩み」を抱えたひと
 のなかに、かつて小学校五年生で「いじめ」の体験をして
 いるひとが目立つことである。小学校五年生という特定で
 きる理由は、母子関係から子どもたちが自立し、集団帰属
 が促進し、集団の凝集性が高まる時期と関係がある。所属
 グループをもたない「はぐれた子ども」が「いじめ」の対
 象になることも多くの事例から証明されている。「はぐれ
 た子ども」の立場を弁解しておくならば、所属グループに
 関心がないか、魅力を感じない場合がある。所属グループ
 の勢力拡大のアクションが、つらい局面を生んでいること
 も事実である。子どもたちが親や教師から自立し、横の集
 団結束することは成長過程のワンステップではあるが、問

題の残るところである。

「いじめ」体験には、いくつかの顛末のパターンがある。
 どのような顛末をたどるにしても、被害者は「自分らし
 さ」を攻撃されることには違いない。体験者は混乱、悲し
 み、修正、変更のいずれかを選択することになる。早い時
 期であったり、事情が理解できない場合は、混乱してしま
 う。何が原因かわからないために「混乱」の状態と呈する。
 混乱は、極度の不安をとめない人間不信にいたることがあ
 る。長期化する場合が多く、その原因として「自分らし
 さ」を直撃されたか、「自分らしさ」が未成熟が考えられ
 る。「悲しみ」の感情が起きるのは、生命体の保全のしく
 みはたらくと考えられる。「大泣き」ができて、事情を
 聞いてもらえたり、涙を拭いてもらうことができれば、比
 較的早く転機を迎えることができる。いずれの事例も「自
 分らしさ」を直撃していることには違いない。「いじめ」
 は、悲しみの体験とはなるが、大泣きである程度の浄化が
 行われ、混乱に比べると長期化はしない。立ち直りが早く
 迎えられる可能性を持っている。「いじめ」が直撃し「自
 分らしさ」の修正を試みる場合がある。修正が想起される
 のは、現状の「自分らしさ」を欠陥として、部分修正する
 ことである。現実には困難な作業である。段階的には混乱

から修正へと移行することが考えられる。極端な事例では自己同一性のトラブルの原因ともなり得る。変更も同様に考えることができる。修正をより深刻に受け止めた状態である。一般的な「いじめ」からの立ち直りは、「混乱」「悲しみ」を経過して「立ち直り」の時期を迎える。しかし、「自分らしさ」に修正や変更を試みた場合は、必ずしも良い結果が得られない。予後の悪いものほど、変更や修正をこころみたものである。

原形の「窓」は変更不可能であるが、取り入れる情報処理の仕方の変更や修正ができるかということが論点となる。また、情報処理の方向性が「受容的」か、「拒否的」であるかが鍵となる。この方向性によって「自分らしさ」が決定するが、できあがった結果に対する変更や修正は意味をなさないと考えるべきであろう。

第五節 近代的自我と「自分らしさ」

封建的な共同体が温存された国家主義的な時代は、「国家の国民」「ムラのひと」「イエのひと」であり、個人は全体の部分でしかなかった。かつては個人は軽視され、自己主張は「非」とされていた。「自分らしさ」は問題となることもなかった。封建的な時代では、国家意識、ムラ意識、

イエ意識の育成が優先された。没個性が「是」とされ、全体のなかに調和することが、人間性の形成とされた。かつて「自分らしさ」を主張することは、あきらかに「非」とされた。

没個性、言い換えれば「没自分らしさ」の時代であり、それに代わることは「幼児像」「青年像」「老人像」などが、「自分らしさ」を代弁していた。「没自分らしさ」が最高潮に到達したのは、軍国主義の時代であり、青年の多くは国のために戦場に向かった。「自分らしさ」は近代とともに萌芽し、戦後急速に成長した。個性としての「自分らしさ」が論議されたのは、わが国の近代の歴史上はじめてのことである。軍国主義時代の教育体制は、「没自分らしさ」の訓育であった。現代は「自分らしさ」が個人の問題として、顕在化した時代である。その点からすれば、「自分らしさ」を個々人が自分の問題としなければならない時代である。

第二章 「自分らしさ」と、江藤淳の死

「自分らしさ」は、ひとの「生きかた」を決定する。情報処理が「受容的」であるか、「拒否的」であるかということが、方向性を決定する。その根拠は、人生の重大なで

きごとに遭遇したときに、「乗り越えられるか」「躊躇するか」「撤退するか」ということは「受容的」か、「拒否的」で決まる。喪失体験に遭遇する状況に対して、それなりに「なすべきことができる」ということは「受容的」に情報を処理した結果である。「拒否的」は、喪失体験という状況に対して、「撤退」「抹消」してしまうことである。江藤淳の自殺を事例として、江藤淳の「自分らしさ」の形態を模索したい。

第一節 江藤淳の終命について

京都新聞（一九九九年七月二十二日夕刊）、文芸評論家の江藤淳（えとう・じゅん、本名江頭淳夫）えがしら・あつお）氏が二十一日夜、神奈川県鎌倉市西御門一ノ一五ノ一の自宅ふる場で左手首を切って自殺しているのがみつかった。六十六歳。江藤淳の自殺の報道に、ある種の驚きと茫漠たるものを感じた。わたしの青年期、時代を風靡した論客として、あこがれと畏敬ともいえる思いでみていた人物のひとりであった。翌々日の新聞朝刊に、「遺書」が掲載された。

心身の不自由は進み、病苦は堪え難し。去

る六月十日、脳梗塞の発作に遭いし以来の江藤淳は形骸に過ぎず。自ら処決して形骸を断ずる所以なり。乞う、諸君よ、これを諒とせられよ。

平成十一年七月二十一日

江藤 淳

新聞掲載の「遺書」には、「心身の不自由」に加えて、「脳梗塞の発作」で進退極まり、「形骸」と化した故に「処決」して自殺することが読み取れる。終命された故人のことについて論評することではなく、わたしなりに受け止めたという意図をくみ取っていただきたい。

「遺書」がどのような意図のもとに書かれたのかというところについて見解を述べてみたい。「だれが」「何のため」「だれに」宛てた「遺書」かということであるが、「だれが」書いたかは自明のことであるが、江頭淳夫ではなく、評論家である江藤淳が書いたものである。「だれに」宛てたものかという点、江藤淳という評論家が読者に宛てた「遺書」である。「何のために」は心身の不自由は進み、脳梗塞の発作が重なりましたので評論活動、執筆困難とな

り、自殺をすることに決めました、という理由と内容である。このことからすれば、公開されても不思議でなく、むしろ評論家江藤淳の意思であったのだろう。職業人としての、江藤淳の責任の果たし方とも解釈できる。ここまでであれば、責任の取り方としては、「断筆宣言」でよいであろうが、自殺という形を取ったことに疑問が残るところである。

「遺書」には、私的な部分がふれられていないが、報道された新聞はそれぞれ、読売新聞二十二日付け朝刊は、一九九四年の先立った妻慶子との写真を掲載している。また毎日新聞二十二日付け朝刊の「余録」で「……………略……………」夫人は亡くなり、江藤さんは重い病気になった。……………」の論評が掲載されている。京都新聞二十二日付け夕刊では、昨年十一月に亡くした妻慶子さんの看病記を『妻と私』として出版したばかり、と記事を掲載している。心身の不自由や脳梗塞の発作と同時に、妻慶子の死の影響があったことを報じている。評論家江藤淳ではなく、生活者江頭淳夫がここに姿を見せている。公開された「遺書」には、妻慶子との死別の喪失体験がなんらふれられていない。私人江頭淳夫と評論家江藤淳は、厳格に分けられていたと考えた。江頭淳夫の「遺書」があったとすれば、別の内容にな

っていたであろう。

第二節 重なった喪失体験

一九九八年五月二十二日に突然訪れた夫妻の試練は、同年十一月七日妻慶子の終命でひとつの終止が付されたかのようにみえた。妻慶子の看病記録は、「文芸春秋」一九九九年五月号に「妻と私」として掲載された。掲載原稿は、同年二月四日に依頼されたもので、脱稿が三月十四日である。原稿は、依頼日の翌日から執筆され、百三枚の原稿として書き上げられたものである。

夫妻の闘病の記録は、妻の死を契機に執筆されたので、読者は「実録」として、ある種の実感をもつことになる。江藤の熟達した文体は、妻慶子の辛苦、病態、病巣、について余すところなく伝えている。「妻と私」が執筆された背景、目的については推測の域をでないが、関心のあろうところである。

「妻と私」は、一九九八年の五月二十二日の交通事故の書き出しではじまるが、すべてのはじまりがここにあったことを伏線としている。病巣部位が延髄の至近距離で進行性であること、終末段階であることが医師よりつけられ、物語りがはじまる。江藤の苦渋と苦境、さらに日常性と非

日常性の往来が実に良く伝わってくる。病状の進行にしたがって、鎌倉の自宅での日常性から、次第に病院という非日常性へ移行する。また、死への距離が次第に近付いていく過程が克明に心象描写されている。終末を迎えた描写は、音のない静寂な無声映画のようにつづられている。

結局、それからの事態の推移は、H主治医の予測通りになった。モニターの脳波が平坦になり、心拍が停止し、Y院長とH主治医・副院長のあいだに、どちらが先に患者の死を確認する聴診器を当てるかについて、儀式めいたやりとりがあった。H主治医と私とが腕時計で確認し合った死亡時刻は、十一月七日午前零時二十一分であった。

「文藝春秋」九月特別号「妻と私」より
傍観者のような、第三者のような、他人事のような現実味が希薄で、実感が伴わない記述である。このような情感が消えた文章となるのは、臨死という場に直面した「ショック期」の記述である。臨死で直面するのが「感情」であれば、ひとを直撃し撃破しかねないからである。ショック期が防壁となって、遠くの出来事のような状態をつくり出

している。「悲しみの期」が訪れたのは翌年一月八日の記述に表現されている。

あのとき、私はこの指環を、鞆の内ポケットに入れたきり、今まですっかり忘れていたのだ。何だ、慶子、君はやっぱりここにいたじゃないか、ずっととほくと一緒にいてくれたじゃないか、と言葉にならない言葉で指環に語りかけると、涙が溢れ出て来た。私はほんの数分の間、その指環を自分の結婚指環の上に嵌めてみた。

「文藝春秋」九月特別号「妻と私」より
「悲しみの期」がつづられたのは、臨死から死別へ、非日常性から日常性へと徐々に移行したことを物語っている。この記述が臨死から約二か月後であり、死別体験を喪失として受け止める時期が到来したことを示している。「妻と私」は悲しみの渦中に執筆されたものである。妻の看病に伴う自らの前立腺の重篤な病状からも軽快しはじめ、「立ち直りの期」の前兆の記述が表現されている。

……略……私の体内に、恢復感が漲りはじめたの

は、この再手術が終了した直後からである。

自分はいま、治りつつある。あの日常性と実務の時間空間に向かう大道を、歩きはじめている。

「文芸春秋」九月特別号「妻と私」より

「妻と私」のなかに躍動感が感じられる数少ない部分である。江藤は喪失体験を直視することにおいて「立ち直りの期」を、体験している。ショック期、悲しみの期を体験し、わずかではあるが、生きる「大道」へたどりついている。「妻と私」は江藤が再起を決した取り組みであった。日常生活への復帰を、ひそかに決して筆を納めている。文章からは静寂とともに、明日からはじまる生活へ向かう姿勢が読み取れる。

平成十一年一月八日(金)、わたしはけいゆう病院を退院した。以後、今日まで養っているうちに、こういう原稿も書けるようになった。四月からはまた大学に通い、主として大学院生の研究指導に当たる日々が開始される。五月には、慶子の遺骨を青山墓地のわが家の墓所に納めるつもりである。

「文芸春秋」九月特別号「妻と私」より

「妻と私」は、江藤淳の妻を喪失したあとの、「喪」のこのころの作業過程としての意味が大きいだろう。「ショック期」をつづり、「悲しみの期」を味わい、「立ち直りの期」がすすかに見えたところで、「喪の仕事」は終わったといえるであろう。江藤淳が執筆という作業を通して、「喪の仕事」を進めようとしたとは考えられないが、執筆という作業のなかで、確実に「喪の仕事」がすすめられたことが読み取れる。積極的な生きることへの姿勢こそ読み取れないが、生と死を享受する基本が崩れていない。「妻と私」は、江藤淳が死別体験を乗り越えるための作業であって、この時点では「自殺」企図は表面化していないと判断するべきであろう。「妻と私」は、「六十四回目の誕生日、異変の始まり」では、妻慶子の「病氣」との遭遇が、実に淡々と病巣の状態について記載され、予後不良の状態が正確に記述されている。悲嘆期の渦中で執筆は、江藤淳の精神的な強靱さを感じることができる。

妻慶子の終命は、一年の闘病、看病の後に迎えた終焉であることからすれば、喪失のショック期はあるものの、それ以降に体験した悲嘆期や抑うつ期に着目すべきであろう。四十年伴侶として生活を共にしたものとしては、その悲しみは想像に余りある。江藤淳の「喪の仕事」は、一年とい

う期間を思考回路のなかで十分に行われたことは「文芸春秋」五月号の「妻と私」で読み取ることができる。しかし、観念的には「喪の仕事」はできないものである。予想を越えた悲嘆期が到来したことが江藤淳を苦しめたことであろう。一九九九年の六月に脳梗塞の発作が到来している。生活という基盤で妻を喪失し、自身の身体の機能を喪失したことになる。江藤淳の「心身」という表現は、身体的な機能喪失から二次的な精神的な負荷も感じていたことが理解できる。このように江藤淳は、悲嘆期にさらに過酷な喪失を体験したことになったわけである。

脳梗塞の発作の後、抑うつ状態が江藤淳を悩ましたことが推測される。江藤淳の場合、執筆活動が断続的にでも続いていたことが、抑うつ状態を不鮮明にしている。江藤淳の文芸春秋社同編集長との終命の日に交わされた会話の中に、「千里の道からも一歩でまだまだ遠い」読売新聞二十一日朝刊掲載記事、とある。この言葉から江藤淳の心象を推測ができる。到達したひとが教訓として、「千里の道も一歩から」ということは、何事も日々の努力が必要であるという指摘として問題がない。しかし、六十六歳の江藤淳が語る言葉としては過酷過ぎる。これから千里を不自由な心身の状態で行かなければならない、人生の難所のなかの

最難関に直面した心象を表現した言葉である。江藤淳の「遺書」の「諒とせられよ」は、回復へは「千里の道」もあり、うんざりするような苦渋を推察くださいだった。「千里の道」を人生と思うとき江藤淳には、挑戦するだけの気力、体力がなかったのだろう。「抑うつ」状態のとき、問題と自分を相対化することがある。問題の拡大視に対して、自分を萎縮してイメージすることが「抑うつ」を増幅する。江藤淳の場合も、自分は「心身の不自由な状態のわたし」として萎縮させ、回復を「千里の道」として拡大視したことによる「抑うつ」の状態が推測できる。

このころの作用を「ゆがみ」とみるか、当然の結論と理解するかということは、議論のあるところだろう。この問題に焦点を置き過ぎると、論点の方向がずれるように思う。この「ゆがみ」は、悲嘆期を乗り越えるための生命力の「蓄積」の時期であって、いわゆる「抑うつ」の状態であったと考えられる。自殺当日の午後二時に来訪した文芸春秋社「文学界」細井秀雄編集長に、ライフワーク「漱石とその時代」のような資料を使つての体力のいる仕事なのでまだ書けない、ともらしている。やや気弱な応対から、江藤淳の精神状態を読み取れる。

第三節 江頭淳夫の原形

江藤淳、本名江頭淳夫の最後の仕事となったのは、文芸雑誌「文学界」八月号に掲載の「幼年時代」である。江頭は自らの少年時代を掘り起こす作業について、本文の中に次のようにつづっている。「……………(略)……………自分の人生がどんなはじまり方をしたのかを、見詰め直してみたい。そして、それがどんな終わり方をしようとしているのかと、できるだけ正確に見くらべてみたい。」と「幼年時代」の文中でつづっている。この自伝のなかで、中心に据えられているのは実母寛子との死別体験である。母寛子との死別は、昭和十二年六月十六日、江頭四歳のできごとである。江頭の生涯の「物語り」は、母の喪失体験がはじまりであった。喪失体験の心理過程は、ショック期にはじまり、混乱期、悲嘆期を経て立ち直り期を迎えるという過程が一般的である。個人差もあり一様に当てはめることはできないが、おおむねこのような過程をあゆむと考えられる。しかし、幼児期には、このような過程をあゆむことなく、立ち直り期が「見せかけ」である場合もある。喪失体験の「心理過程」は、生体保全のしくみである。ショック期も悲嘆期も保全のしくみであり、欠くことができない。幼児期では、喪失の重大さが判断できないために、ショック期を体

験することがない場合がある。幼児が肉親と死別した場合、ショック期で保全されないで、悲しみとして直撃すれば、心理的なこころの傷として残る。幼児期の喪失体験は立ち直り期を迎えにくく、喪失に対して過敏な「構え」を形成する。この「構え」を原形として形成してしまう。江頭は「自分らしさ」の原形として、喪失に対しての「構え」をもって生きたといえる。

おわりに

「自分らしさ」の原形が人生の早期に形成され、生涯の方向性を決定する鍵となる。喪失体験の一連の研究を通じて、早期の喪失体験がいかに「生涯」を決定するか、ということが重くのしかかってきたことも事実である。江藤淳の母親喪失体験が、後の自殺への遠因であったと考えるならば、幼児期につくられた原形の意味が重要性を帯びることになる。この時点で、語れることは、生きるということ。「原形を生きる」にはかならない。

あらたな展開として、「一如」ということが研究の鍵となるように思う。「自分らしさ」が固着し、孤立したときに重大な過ちを侵すのではないだろうか。江藤淳が重なる喪失体験の顛末を自殺で締めくくったが、背景に「つら

さ」の耐性が過敏であったことが考えられる。江藤淳の「瑞々しい研究活動」は、妻慶子の「こころの支え」と連帯して成立していたといえるであろう。母寛子との喪失体験は、幼児期の体験だけに受容的に事実と対面することが阻まれたことが考えられる。「うしなうこと」への忌避観の増幅は幼児期の生活史から生まれたものであったであろう。

早期の喪失の甚大さは、論を待たない。江藤淳が「妻と私」を通して、再生を期したのも十分に理解できる。再生を碎いたのは脳梗塞である。「自分らしさ」と原形が固着し、「生きること」が閉じられ、ある重篤な状態に陥ったことが考えられる。危機からの脱出は、他者と連帯し固着から開放されるより解決の方法はない。「自分らしさ」が生きる力となるのは、他者と自由に交流ができ、連帯した状態である。閉塞はきわめて危険な状態をつくりだすことが理解できる。原形が過敏であればあるほど、開放され連帯している状態が望ましい。江藤淳の瑞々しい思考、研究活動は、生命力を発揮していたからであろう。江藤淳の喪失への果敢に挑戦した姿は、「妻と私」に残された。しかし、重なる喪失は、江藤淳の喪失体験に対する忌避観を増幅させた。閉塞状況を助長させる要因はそらい過ぎていた。

参考文献

- 時実利彦著『脳の話』岩波書店一九六二年八月
 時実利彦著『脳と人間』雷鳥社一九六八年七月
 遠城寺宗徳監修「遠城寺式・乳幼児分析発達検査表（九大小児科改訂版）」慶応通信一九七七年九月
 松井豊編『悲嘆の心理』サイエンス社一九九七年四月
 江藤淳著『妻と私』文芸春秋一九九九年七月

参考資料

- 雑誌『文学界』文芸春秋八月号一九九九年八月一日
 雑誌『文藝春秋』文芸春秋九月特別号一九九九年九月一日
 「京都新聞」一九九九年七月二十二日夕刊
 「読売新聞」一九九九年七月二十三日朝刊
 「毎日新聞」一九九九年七月二十三日朝刊

(本学助教 社会福祉学)